

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 5 月 25 日現在

機関番号：12301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2019

課題番号：16K20949

研究課題名(和文) 認知症を有するがん患者家族に対する看護支援の検討

研究課題名(英文) Examination of nursing support for cancer patient with dementia

研究代表者

塚越 徳子 (Tsukagoshi, Noriko)

群馬大学・大学院保健学研究科・助教

研究者番号：60723757

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円

研究成果の概要(和文)：2つの研究を通して、認知症を有するがん患者家族に対する看護師の看護実践上の課題を明らかにした。がん治療は、治療選択肢が多く、高額な治療費がかかり、重い副作用が出現する可能性がある。そのため、看護師は、患者のセルフマネジメント支援を積極的に行っていた。しかし、認知症を有すると、治療の影響を十分に理解した治療選択が行われず、患者のセルフケアが十分に期待できない。その場合に、看護師は困難やジレンマを抱えていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「超高齢化社会」の到来とともに、認知症を有するがん患者は、今後ますます増加することが予測される。本研究は、今までの知見を集約し、専門看護師・認定看護師の俯瞰的な立場を通して患者や家族、医療者の現状を捉えることができた。そのため、認知症を有するがん患者や家族が置かれた現状の包括的な理解や、個人も含めた組織的な看護実践能力向上に結びつけることが可能である。本研究成果は、がん看護に従事する看護師への教育的支援の基礎資料となり、認知症を有するがん患者家族に対する支援の質向上に寄与することができる。

研究成果の概要(英文)：Two studies revealed the problems of nursing practice for nurses with cancer family members with dementia. Cancer treatment has many treatment options, is expensive, and may have serious side effects. Therefore, nurses have actively provided self-management support for patients. However, when the patient has dementia, the treatment selection cannot be performed while fully understanding the influence of the treatment, and the self-care of the patient cannot be expected sufficiently. In that case, the nurse had difficulties and dilemmas.

研究分野：がん看護学

キーワード：がん 認知症 専門看護師 認定看護師

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

我が国の高齢化率は 25.1%であり、今やかつてどこの国も経験したことの無いような「超高齢社会」の到来を迎えている。高齢化の進行とともに、認知症を有する高齢者は、65 歳以上の 15%を占めることが推計され、今後ますます増加することが予測される。高齢化率の上昇は、高齢者のがん発症率・有病率の増大を意味し、認知症を含めた高齢者特有の問題を考慮したがん治療の在り方を検討することは急務といえる。

認知症とがんとの関連として、認知症を持つ患者はがんの発見が遅くなること、がん性疼痛を適切に評価できないことなどが明らかとなっている。また、認知症を有する患者のがん罹患後の予後は合併症やケアの質によって多少なり影響することも示唆されている。認知症状は、記憶障害だけでなく、実行機能障害や失行、失認、失語なども有し、今まで行っていた日常生活そのものに障害が出現すると言える。つまり、がん治療に認知症の有無は影響することが明白であり、認知症を有するがん患者の看護支援の検討は重要である。

認知症を有しているからといって、何も考えていない、理解できていないと考える医療者が多いという指摘がある。近年、医学モデルによる認知症患者の理解から、パーソン・センタード・モデルによる理解が広まってきている。患者自身を疾患ありきで理解せず、患者個人の生活歴や価値観、性格から理解していくモデルである。それは、家族にとっても、医療者にとっても重要な考えであると言える。認知症患者にとって、家族は長年生活を共にしていた安心できる者であり、心の拠り所である。一方、家族は認知症に加え、がん罹患したことにより多くの困難や苦悩を抱えていることが予測される。家族への看護支援を体系化することは、患者への安心・安楽につながると考える。

がん患者の看護研究のうち認知症に特定した研究は、疼痛評価に関して(久米, 2015)、緩和ケア病棟での認知症スクリーニングツールの開発(櫻井, 2014)などが散在するが、そのほとんどが事例研究である。

高齢がん患者に関する看護研究では、高齢者ゆえの意思決定に関する研究(安井, 2015、森, 2012)や治療期にある高齢がん患者に関する研究(森本, 2014、小杉, 2013、原, 2011)などがあるが、家族に焦点を当てたものはほとんど見られない。

がん患者の家族に焦点を当てた研究では、鈴木らががん罹患した患者と家族における関係性に関する文献の内容分析を行っている。その中で、患者との関係性の内容にはポジティブとネガティブな要素に分かれ、患者と家族の良好な関係は、日々の生活の中で感謝や愛情といった肯定的な感情のやり取りをすることで、互いの存在価値を認め合うことで築かれることが示唆されている。一方で、患者と家族の脆弱した関係は、互いの必要以上の気遣いであることと家族が患者との関わりを重荷に感じることで陥ることが示唆されている。

認知症を有したがん患者の家族に対する研究は、わが国においてほとんど行われておらず、基礎資料となる研究も見当たらない。がん患者の家族との関係性の文献検討から、患者と家族の関係性は双方に影響しあい、ポジティブにもネガティブにも変化していくことが明らかとなっていた。がん罹患したことに加え、認知症を有している場合、患者の苦悩はもちろんのこと、家族の苦悩も想像しがたい。認知症を有したがん患者の家族に対する看護研究が必要と考える。

2. 研究の目的

本研究は、認知症を有するがん患者家族が必要とする看護支援を明確にする。さらに、看護師が行っている認知症がん患者家族に対する看護実践内容から家族が必要とする看護支援との相違を明らかにし、看護実践上の課題を明確にする。以上の研究を踏まえ、認知症を有するがん患者家族に対する看護支援モデル構築へ発展していくことを目的とする。

3. 研究の方法

本研究では、以下の A、B について調査した。

A: 認知症を有するがん患者家族が必要とする看護支援を明らかにするための研究

先行研究から看護師が捉える認知症を有するがん患者やその家族の問題状況について文献検討した。2006 年～2018 年の約 10 年間の国内外の研究論文から、看護師が捉える認知症を有するがん患者家族の困難を表す文脈を吹き出し、質的帰納的に分析した。また、文献の研究デザイン、文献に記載された対象者のがんの部位、認知症のタイプ、がんサバイバーの治療期を分類した。国内文献は、医中誌 web、国外文献は、MEDLINE、CINAHL を用いて検索を行った。

B: 認知症を有するがん患者家族への看護実践上の課題を明らかにするための研究

がん看護領域の専門看護師・認定看護師に対し面接調査した。A 県内のがんに関連した看護領域の専門看護師・認定看護師が所属する 26 施設の代表者に調査協力を依頼し、15 施設より承諾を得られた。15 施設 54 名に調査協力を依頼し、調査への承諾が得られた 8 施設 11 名に調査を実施した。調査は、インタビューガイドを用いた半構造的面接調査を行った。主なインタビュー内容は、認知症を有するがん患者家族への看護実践内容、専門看護師・認定看護師として認知症を有するがん患者家族を支援する時に課題と感ずることなどとした。分析方法は、質的記述的分析手法を参考に、質的帰納的に分析した。

4. 研究成果

1) A: 看護師が捉える認知症を有するがん患者家族の問題状況に関する文献検討

対象論文の概要

対象論文は、国内文献 26 件、国外文献 6 件の合計 32 件であった。2015 年、2016 年の 5 件が最も多く、継続的に発刊されていた。研究デザインは、質的記述的研究が 27 件で最も多く、実態調査的研究が 5 件であった。対象は、患者のみ 11 件、患者と家族 11 件が最も多く、次いで看護師 7 件、家族のみ 3 件であった。

がんの部位（重複あり、n=41）は、消化器が 17 件と最も多く、次いで乳房 4 件、男性生殖器 4 件であり、記載がない文献は 5 件であった。認知症のタイプ（重複あり、n=37）は、アルツハイマー型 7 件で最も多く、脳血管型 2 件、レビー小体型 2 件、混合型 1 件、記載なし 23 件であった。

がんサバイバーの治療期は、急性期 13 件と最も多く、終末期 9 件、長期的に安定した時期 4 件、延長された生存の時期 3 件、時期を問わない 3 件であった。

看護師が捉える認知症を有するがん患者家族の問題状況

91 コード、23 サブカテゴリー、5 カテゴリーが生成された。5 カテゴリーは、【中核症状や BPSD によるがん治療管理への悪影響】【中核症状や BPSD によるがん身体症状の増悪】【がんやがん治療による中核症状や BPSD の悪化】【合併によるがん治療や療養先選択への影響】【がんと認知症の合併による家族負担の増大】であった。

まとめ

看護師が捉える認知症を持つがん患者や家族の問題状況に関する文献研究を行い、結果から、看護師は、認知症状とがんの身体症状によって生じる様々な問題を抱えていることが明らかとなった。看護師の困難は、認知症がん患者・家族の特徴の理解と看護実践経験の不足によって生じていることが推察され、患者・家族の特徴の理解を促す方策として、認知症患者・家族の理解を深めるための機会を増やす、認知症がん患者・家族の現状を理解する、認知症がん患者・家族の看護上の課題を探ることの必要性が示唆された。また、看護実践経験の不足を補う方策として、認知症患者・家族の看護経験者との実践の協働や認知症がん患者・家族の看護実践を振り返る機会を増やすことの重要性が示唆された。

2) B: がんに関連した看護領域の専門看護師・認定看護師が捉えた認知症を有するがん患者家族の対する看護実践上の課題

対象者の概要

研究対象者は、8 施設 11 名のがんに関連した看護領域の専門看護師・認定看護師であった。11 名の年代は、30 歳代 3 名、40 歳代 6 名、50 歳代 2 名であった。所属は、病棟 3 名、外来 4 名、その他 4 名であった、その他は、退院調整部門など所属施設内を横断的に活動できる部署に所属していた。がん看護専門看護師は 5 名、認定看護師は 8 名であり、2 名は両方の資格を有していた。認定看護師は、緩和ケア認定看護師が 4 名、がん化学療法認定看護師が 2 名、がん性疼痛看護認定看護師が 1 名、乳がん看護認定看護師が 1 名であった。専門看護師の活動年数は、1 年以上 5 年未満 2 名、5 年以上 10 年未満 3 名であった。認定看護師の活動年数は 1 年以上 5 年未満 2 名、5 年以上 10 年未満 3 名、10 年以上 3 名であった。

がんに関連した看護領域の専門看護師・認定看護師が捉える認知症がん患者や家族の看護実践上の課題

がんに関連した看護領域の専門看護師・認定看護師が捉える認知症がん患者や家族の看護実践上の課題として、125 コード、21 サブカテゴリー、6 カテゴリーが生成された。主なカテゴリーは、【認知症がん患者を尊重した治療選択支援】【認知症がん患者の安全と QOL を保障したがん治療実施】【がんと認知症看護を統合した看護職への教育】などであった。

まとめ

がん治療の多くの研究では、高齢者を除外した治療成績が公表されることが多く、高齢者に対するがん治療の有効性や生活への影響が十分にはわからない。そのため、高額で副作用の強いがん治療を施行するべきか否かなどのジレンマを抱えていた。また、認知症に関連した看護領域の専門看護師・認定看護師と協働する中で、このように患者の意思を尊重できるように援助すればよいなどと、がん看護の得意とする看護支援から広がった視点で看護支援を検討することができている者もいた。従来のがん看護の視点を生かしながら、認知症看護との良い協働を促進していくことで、認知症を有する患者家族への支援がより充実する可能性が示唆された。

3) 認知症を有するがん患者家族に対する看護支援モデル構築に向けた課題

A、Bの研究を通して、認知症を有するがん患者家族に対する看護師の看護実践上の課題を明らかにした。がん治療は、それぞれのがんに応じて治療選択肢が多く、高額な治療、重い副作用が出現する治療もある。そのため、がん看護を実践する看護師は、患者の主体性を重視したセルフマネジメント支援を積極的に行っていた。しかし、認知症を有した場合、治療の効果と悪影響の両方を十分に理解した治療選択が行われない場合や、患者のセルフケアが十分に期待できない場合がある。その際に、看護師は困難やジレンマを生じていることが明らかとなった。

「超高齢化社会」の到来とともに、認知症を有するがん患者は、今後ますます増加することが予測される。本研究は、今までの知見を集約し、専門看護師・認定看護師の俯瞰的な立場を通して患者や家族、医療者の現状を捉えることができた。そのため、認知症を有するがん患者や家族が置かれた現状の包括的な理解や、個人も含めた組織的な看護実践能力向上に結びつけることが可能である。本研究成果は、がん看護に従事する看護師への教育的支援の基礎資料となり、認知症を有するがん患者家族に対する支援の質向上に寄与することができる。

今後は、本研究成果をもとに認知症を有するがん患者家族に対する看護支援モデル構築を目指したい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 塚越徳子
2. 発表標題 がんに関連した看護領域の専門看護師・認定看護師が捉える認知症を有するがん患者・家族に対する看護実践上の課題
3. 学会等名 第33回日本がん看護学会学術集会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----